

子どもをもたない選択とは

—子どもがいない女性を対象にした心理学的研究の概観—

教育心理学コース 佐藤 佳淑

Women's Choice of Not Having a Child: A Review of Psychological Studies

Kasumi SATO

Deciding not to have a child leads to childless status throughout the life span. However, relatively little is known about the long-term women's experience of being childless after the choice. The present paper aimed to report a brief review of research that explored how women's experience of being childless affects their psychological aspects, throughout the life. First, the article reviews the process of becoming childless, focusing on women during and a few years after their infertility treatment. Next, it presents of the review of empirical research on psychological well-being outcomes and its factors, among childless women at middle age and beyond. Finally, after pointing out the issues of previous research, it provides new directions for future research, especially, in Japan.

目次

はじめに

1. 子どもをもたない選択とは
 - 1) 不妊治療初期から中期
 - 2) 不妊治療の断念に至るまで
2. 子どもがいないことの長期的な影響
 - 1) 子どもがいないことによる心理的影響
 - 2) 子どもがいないことによる心理的影響の規定因
3. 先行研究の限界と課題
 - 1) 生涯発達という観点からの示唆
 - 2) 意味づけの多様性に着目する必要性
4. 日本における研究の今後の方向性

結語

はじめに

現今の日本社会では、子どものいない女性（夫婦）の割合が急激に増加している。国立社会保障・人口増加研究所（2012）によれば、2010年において、結婚持続期間が15—19年の夫婦の5.6%が、子どもをもっていないことが報告され、その数値はここ20年間で倍以上となっている。結婚していても何らかの理由により“子どもをもたない”ことを選択した者、あるいは選択せざるをえなかった者もあるだろう。その中でも特に心理的に深刻とされているのが、不妊であると考えられている。不妊とは、妊娠を望む健康な男女が

性生活を送っているにも関わらず、1年以内に妊娠しない状態を指す（日本産科婦人科学会, 2015）。生殖医療技術のめざましい進歩が報告され、不妊治療患者数も増加し続けていることが報告されているが（国民生活白書, 2005）、治療によって子どもを授かるとは限らないことは事実である。そして、晩婚化による治療開始時期の遅れも大きな問題として社会的に意識され始めているが、この遅れによって、“本来であれば”子どもを授かることできた夫婦が、子どもを諦めざるをえない状況に追い込まれていることもまた事実である（NHK取材班, 2013）。このように、生殖医療の向上が喧伝されている一方で、子どもをもちたいと期待を抱き、不妊治療に臨んだとしても、治療を断念する女性（夫婦）がいることにも目を向けなければならないだろう。また、子どもをもたないことに関して、意思決定が常に存在するわけではないことにも留意すべきである。仕事上の理由やなんらかの事情により、子どもを産むタイミングを逃し、子どもがいないままになってしまった（remaining childless）ケースも存在する（Keizer, Dykstra & Jansen, 2008）。

子どもをもつことが、女性自身の生き方や子どもに対する価値観に基づき、決定される、人生のひとつの“選択肢”として位置づけられている（柏木・永久, 1999）。そのように考えれば、不妊のようにその運命を背負わされた（竹家, 2008）場合を除けば、子どもをもたないこともまた、人生におけるひとつの選

択肢であると言えるのではないだろうか。しかしながら、元来研究の対象とされてきたのは特に、親となった女性たちであった。子どもがいない女性は、親となった女性との研究上の比較にのみ取り上げられることが多く、“母親でない人 (others)” という扱いを受け、研究の主眼はあくまで母親であった (Connidis & McMullin, 1999)。子どもがいない女性たちそのものについては、あまり研究が行われてこなかったのが現状である。欧米をはじめとする海外諸国では、子どもがいない女性を対象にした心理学的研究がすでに蓄積されつつあるが、日本では依然として研究の数は少ない。それでは、彼女たちにとって、子どもをもたないことを選択した経験 (あるいは選択せざるをえなかった経験) によって、どのような心理的影響が及ぼされ、その経験はどのような意味を有するのだろうか。子どもがいない女性が増えている現状だからこそ、この問題を掘り下げていくことが必要である。

したがって、本稿では、まずは現在までに行われている子どもがいない女性を対象にした心理学的研究の概観を行い、従来の研究について考察を行う。そして、今後日本ではどのような研究が必要か、進むべき方向性について論じていくことにしたい。

1. 子どもをもたない選択とは

海外では、子どもがいない理由¹⁾によって、子どもがいない女性を、“voluntary (自ら進んで)” と “involuntary (自分の意思ではない)” にわけて研究を行ってきた (Allen & Wiles, 2013)。例えば、自己実現の追求のため子どもをもつことを選択しなかった女性は voluntary に分類される。一方、身体的な理由や不妊は involuntary の最たる理由の例としてあげられる。しかし、実のところ、上記の理由だけでなく、その2つのどちらにも分類できない理由が報告されている。例えば、経済的な問題や、パートナーの問題 (“My partner would be a bad parent”, “My partner doesn't want kids”) は、どちらにも分類できない問題として挙げられている (McQuillan et al., 2012)。また、夫婦が子どもをもたない状態に至るまでは、ひとつの理由によって、ある時期に突然決定されるものではなく、複数の理由が顕在的もしくは潜在的に関与している場合もあるだろう。なかでも、不妊と診断された夫婦 (女性) が不妊治療を経て治療を断念し、子どもをもたない選択をするまでを検討した研究は、海外だけでなく日本でもさかんに行われている。まずは、研究が蓄積

されている、治療初期から断念に至るまでに抱く感情や心的現象の側面について概説していく。

1) 不妊治療初期から中期

不妊治療を経験する女性にとって、治療初期は子どもを授かることを期待するが (Blenner, 1990)、治療に失敗すると絶望感や孤独感を体験する (Peddie, van Teijlingen & Bhattacharya, 2005)。そのため、不妊治療はしばしば、“ジェットコースターのような感情経験” と表現される (Greil, 1991)。治療に関しては、“子どもをもてるのだろうか” という不安を経験することや (Eugster & Vingerhoets, 1999)、度重なる治療の失敗によって抑うつ状態になることが明らかにされている (e.g., Verhaak et al., 2007)。それらの感情を経験する背景として、治療による身体的な苦痛だけでなく、治療によっても不妊の原因が特定できないこと (Paul et al., 2010)、さらには、治療の先が見えないという、不妊治療独自の不確かさ (竹家, 2008) が指摘されている。また、そのようなネガティブな感情やストレスをいかに低減するのかというコーピングの観点からも、研究はさかんに行われてきた。例えば、治療中のコーピング方略として、夫婦関係を良好にさせることと、配偶者からの心理的サポートが有効であるということが示されている (Mahajan et al., 2009)。そして、心理的サポートに関しても、日本人女性を対象にした研究から、治療中のストレス要因として、配偶者のサポート不足が指摘されている (Matsubayashi et al., 2004)。

2) 不妊治療の断念に至るまで

不妊治療によって誕生した新生児は増加しているものの (日本産科婦人科学会, 2014)、その陰では、治療によっても子どもを授かることのできない夫婦が存在する。不妊治療に望みをかけるも、子どもをなかなか授からないことは、想像するよりもはるかに多くの苦難やネガティブな感情を抱くのだろう。Johansson & Berg (2005) では、治療に失敗して2年が経過しても、子どもを授かることができなかった悲しみ (grief) が、生活の中心を占めることを報告している。子どもがいないことによるストレスの主要な要因は、“子どもがいる家族への妬み” と “将来孤独になることへの不安” であった (Albayrak & Günay, 2007)。このように考えると、治療によっても子どもをもつことのできないという、満たされない思いをいかに対処すればいいのかわからない女性が、数多く存在することは想像に難くない。

そして、不妊治療の終結は、ほとんどの場合、患者自身に委ねられている (Peddie et al, 2005)。不妊治療のなかで、徐々に“子どもをもたない”という選択肢についても、思いを巡らせることもある。例えば、安田・やまだ (2008) によると、不妊治療によって、生命への畏敬の念を抱き、自身の身体の様子を気遣うなかで、子どもに執着することなく、夫婦2人だけの生活を展望する様子がみられたという。不妊治療は、子どもをもつために治療を諦めたくない思いと、治療継続への戸惑いとのほざまで、常に気持ちが揺らぎつつ (安田, 2005)、子どもがいない人生を考え始める時期であると言えよう。子どもが欲しいと望み不妊治療を経験した女性にとって、子どもをもたないことを選択するまでのプロセスは、これまで描いてきた“子どもを産む”“親になる”という人生展望を設計し直さなくてはならないという意味で、極めて重大な意味をもつと考えられる。Daniluk (2001a) は不妊治療を経験した夫婦を対象に、治療断念して数か月後から32か月後までに至るまで、4度にわたる縦断的なインタビューを実施し、子どものいない人生を受容するまでの心理的プロセスを検討した。その結果、治療を断念した最初は、将来に不安を抱いていたが、断念して数年が経過すると、子どもがいない人生に意義を見出すことができるようになったことが示唆された。不妊に直面することは、子どもをもつという人生への“脅威”となりうるという意味では、命にかかわる病気に罹患するようなものであり (Daniluk, 2001b)、精神的にネガティブな作用をもたらすことにもなりかねない。しかし、このように、子どもをもつ人生以外の方向を新たに模索する過程こそが、彼女らの連綿と続いていく生活・人生を送る上でポジティブな作用をもたらすと考えられる。

ここまでは、子どもをもたない選択とその後数年間までの研究を中心に概観した。しかし、従来の研究のほとんどは、子どもがいない状態になるまで (becoming childless) に着目してきたが、子どもがいない状態 (being childless) そのものを検討する必要があるという指摘もされている (Connidis & McMullin, 1999)。子どもをもたないことを微塵や迷いもなく選択する人もいる一方で、今後の人生に対する不安などのネガティブな感情を抱きつつも、徐々に子どもをもたないことを選択していく (もしくはしていかなざるをえない) 人も一定数存在する。いずれの場合にせよ、子どもがいない状態は、その選択の後も続いていくということを考慮すれば、より長期的な視点で、

子どもがいないということが人生に与える影響を明らかにしていく必要があるといえる。したがって、子どもがいないことの影響を考える上で、子どもをもたない選択をするまで、もしくは選択してから数年しか経過していない、成人期前期から成人期後期のみに注目するだけでは不十分なのではないだろうか。この点に関して、DeOllos & Kapinus (2002) は、子どもがいない影響を、生涯にわたった観点でも検討する必要性を指摘している。中年期以降に及ぼされる影響を検討することで、彼女らの中年期以降の精神的健康の支援への示唆をもたらすと考えられる。これらを踏まえると、その選択から何十年が経過した中年期以降に着目する意義は大きいだろう。昨今では海外をはじめとして、中年期以降における子どもがいないことによる影響や、当事者にとっての子どもの不在の心理的意味を記述した研究が、僅かではあるが行われ始めている。

2. 子どもがいないことの長期的な影響

この節では、現在までに心理学の分野で行われてきた、子どもをもたない選択をした後の中年期以降の研究を概説する。これまでの研究は主に、子どもがいないことによる心理的影響を検討したものと、その心理的影響を規定する要因を検討したものに分けられる。

1) 子どもがいないことによる心理的影響

子どもがいない女性を対象にした従来の研究は、子どもがいない女性を対象にしていたとしても、それはあくまで子どもがいる女性との比較対象でしかなかった。その一端で、子どもがいない女性に焦点を当て、子どもがいないということが、そもそも彼女らにどのような心理的影響を及ぼすのかについても、少ないながらも論じられてきた。本稿では、親となった女性との比較ではなく、子どもがいない女性そのものを対象にした研究を取り上げ、彼女らの心理的側面について概説していくことにしたい。

子どもの存在は、“人生を充実させるもの”として捉えられ (Langdrige, Sheeran & Connolly, 2005)、“子どもがいない人生は、虚しく、孤独である”ということが暗黙裡に想定されてきた (Hansen, 2012)。さらに、中年期 (特に50代はじめ) は、女性にとって、過去に喪失してきたものについて、後悔が生じる時期であるとされている (Mitchell & Helson, 1990)。そして、子どもがいない女性にとっては、子どもを産めないことが決定的となる、閉経が訪れる時期でもある (Ferland

& Caron, 2013)。そのため、中年期以降は、子どもをもたない選択に関して、後悔が生じる時期なのではないか。これらを半ば自明のものとした上で、中年期以降の子どもがいない女性の精神的健康が多く検討されてきた。

しかしながら、その結果は、上記の予想とは異なるものが多く、子どもがいないことは、中年期以降の精神的健康には直接的にほとんど影響しないというものであった (e.g., Koropecj-Cox, Pienta & Brown, 2007)。さらに、voluntaryとinvoluntaryという、子どもがいない理由の区分ごとに、精神的健康の程度の比較も行われてきた。例えば、Jeffries & Konnert (2002)によって、involuntaryの女性は、voluntaryの女性と比較して、中年期や老年期において精神的健康が低く、人生の目標を掲げている割合も低く、“子どもに関する後悔”を経験している度合いが高いことが示唆された。そして、子どもを断念せざるをえなかった場合には、より多くの後悔を経験するのみならず、その後悔もより深刻で、長期的に持続する傾向が見られた (Jeffries & Konnert, 2002)。

中年期や老年期の女性に焦点を当て、子どもがいないことへの意味づけや現在抱えている感情について、当事者の視点で把握した研究がある (Table 1)。また、DeLyser (2012)は、42-60歳の子どもがいない女性 (voluntary childfree women) 15名を対象に、インタビューを実施した。その結果、15名中12名が中年期になった現在も、親となる以外のライフコースの選択について後悔を経験していなかった。その一方で、子どもを授かることができずに不妊治療を断念し、20

年が経過した現在も、悲しみに暮れ続けている女性の姿も報告されている (Ferland & Caron, 2013)。

これらの研究知見から、子どもがいないことの精神的健康への影響は、子どもがいない理由によっても異なることが示唆されるだけでなく、ほかの要因も介在していることが推察される。この点に関して、子どもがいない女性の精神的健康を規定する要因は何であるのか、その違いは何によってもたらされるのかということについても、検討され始めている。

2) 子どもがいないことによる心理的影響の規定因

子どもがいない女性の中でも、不妊による心理的危機は、治療断念後も継続していくと考えられている。女性の中には、自己を責め、罪悪感だけでなく (Volgsten, Svanberg & Olsson, 2010)、トラウマまでも経験することが報告されている (Rosner, 2012)。特に、Volgsten et al. (2010)は、不妊の原因が分からずに医師から十分に説明されなかったことが、子どもがいない人生の受容を困難にするひとつの要因であると考察している。

また、中年期以降における“子どもへの思い”が、精神的健康に影響することに着目した研究が見られる。例えば、治療断念から11-17年が経過した時点において、子どもへの思いを断ち切れないでいる人の方が、精神的健康が低いことが報告された (Gameiro et al., 2014)。中年期及び老年期の男女 (子どもの有無を問わない) を対象としたKoropecj-Cox (2002)では、中年期 (あるいは老年期) になった時に、子どもをもつこと (もしくは、もたないこと) を選択したこと

Table 1 老年期における子どもがいないことの意味 (Allen & Wiles, 2013を参照に作成)

意味づけ
幸福で、悩んだことはない (positive, not a gap but an enjoyable way of doing life)
結婚・子どもは人生のすべてではない (just one of a range of options not taken up)
虐待を断ち切ることができた (actively chosen to prevent harm)
判断の問題 (A matter of discernment—having children is only an option if appropriate conditions are met)
運命だと受容している (A fate to be accepted)
時代のせい (A cohort effect)
まあまあ (Relevant at times)
中絶については、トラウマである (Being a survivor of trauma)
徐々に現実を悟る (A dawning realization)
血縁による子どもだけがすべてではない (An inaccurate description)
養子をとることは最良の選択ではない (Better than adopting)
女性としての挫折, 不自然 (A missed opportunity, thwarted “maternal instinct”, “unnatural”)
子どもを欲しいと思わないのは自然だった (“Natural” to not want children)
依然として深い悲しみ (A matter of some grief)
家族の一員としてほかにやるべきことがあったため (Can be due to family-of-origin obligations)
違う家族の形がよい (Something that runs in families)

について、どのように捉えているのか（肯定的か否定的か）によって、孤独感や抑うつ程度に有意な差が生じることを実証している。例えば、子どもがいない女性の場合、その選択を肯定的に捉えている女性は、抑うつ得点が有意に低かった。孤独についても同様に、選択を肯定的に捉えている女性と否定的に捉えている女性の間に、有意な差がみられた。このことから、子どもへの思いなどの、自身に潜在する心理的な要因もまた、彼女らの精神的健康に影響を及ぼしているとも考えられる。

また、McQuillan et al. (2012) は、中年期前期における“子どもへの思い”だけでなく、子どもをもたない選択をした際の“障壁”に着目した上で、子どもがいないことに関する気がかりの違いを量的に検証している。まず対象者に、「生涯でもつことのできる子どもの数を選べるとしたら、何人選びますか。」と尋ねた上で、その答えが0人の場合には“voluntarily群”とし、1人以上の場合には次の3つのカテゴリーに分類した。不妊にあてはまる場合は“生物学的な障壁があった群”に、そして、不妊以外の女性で、経済的な問題や配偶者との問題があった場合は“状況による障壁があった群”に、特に問題もなかった場合は“障壁がなかった群”に彼女らをわけ、気がかりの程度を測定している。その結果、“生物学的な障壁があった群”が、子どもの不在に関する気がかりを最も抱えていた。また、この気がかりは、“母親になることの重要性”によって、媒介されていることが示された。

そのほかに、子どもがいない女性の中年期以降の精神的健康を規定する要因として、周囲との交流の有無や現在の婚姻状況などが考えられている。具体的には、子どもがいなくても、周囲との交流が活発であるほど、精神的健康は高い傾向にあると報告されている(Huijts, Kraaykamp & Subramanian, 2013)。また、50-84歳の子どもがいない人の中でも、未亡人は特に、孤独感が高く、抑うつ傾向にあることも示されている(Koropecjy-Cox, 1998)。老年期の子どもがいない女性の精神的健康の規定因を、社会的交流の質であると結論づけている研究は多く(e.g., Beckman & Houser, 1982)、配偶者をはじめとする周囲の人との社会的な相互作用が、精神的健康にポジティブな影響を及ぼしていることが示唆される。

さらに、近年では、中年期以降の精神的健康に影響を及ぼすものとして、生成継承性(generativity)が注目されている。生成継承性とは、エリクソン(Erikson & Erikson, 1982 村瀬・近藤訳 2001)が提唱した概念

であり、「子孫だけでなく、新しい存在・製作物・概念を生み出すこと」と定義されている、中年期以降の発達課題である。生成継承性と精神的健康との関連について、子どもがいる人といない人の比較がさかんに行われている。例えば、Rothrauff & Cooney (2008)では、子どもがいる人だけでなくいない人も、生成継承性を高める経験によって、精神的健康を高めていることが示された。したがって、生成継承性は、中年期以降の子どもがいない女性の心理的適応に重要であると考えられる。

そして、老年期となってからも、不妊治療を経験し、子どもがいないことを受容できずに苦しむ女性は、自分のことを“子どもがいない”とより多く表現し、反対に、受容できている女性は、“親となること以外の役割”を積極的に果たそうとする(Wirtberg et al., 2007)。たしかに、治療を断念した直後は、子どもがいない人生に折り合いをつけることが難しく、その悲しみは、“解決されることのない深い悲しみ(unresolved grief)”と表現されている(Volgsten et al., 2010)。しかし、何十年という長い時間をかけてでも、子どもへの思いを変容させ、“親になること以外”の新たな自己像や人生設計を構築し直すことにより、子どもがいない人生に、少しでもポジティブな意味を付与することは可能であると考えられる。ただし、そのような女性が各々の人生を営んでいく中で、いかに子どもへの思いを断ち切り、切り抜けているのかというプロセスは、ほとんど明らかとされていない(Rosner, 2012)。

前述のように、近年の心理学的研究において、子どもがいない女性にもようやく関心が向けられ、中年期、そして老年期において、彼女らが抱く感情や、彼女らにとっての子どもがいない人生の意味を問うてきたように思われる。このような研究の動向について、様々な指摘が既にされているが、本質的に検討すべき点として、本稿では、子どもがいないことを、喪失だけでなく、発達という枠組みで記述する必要性と、女性たちの意味づけの多様性を考慮する必要性を論じたい。次節では、まずは、子どもがいないことについて検討してきた、先行研究の問題点を指摘する。そして、圧倒的に数が少ないが、国内で行われている研究の俯瞰を通じて、日本という社会・文化のもとで、“子どもがいない”ことを研究することの意義を論じるとともに、今後目指すべき研究の方向性を示すこととする。

3. 先行研究の限界と課題

1) 生涯発達という観点からの示唆

子どもがいないことは、特に、不妊治療を経験した女性にとっては、“喪失体験”であると先行研究において多く言明されてきたが (e.g., Matthews & Matthews, 1986), “獲得”という側面でこれらの事象を捉えることも可能であるだろう。Lee et al. (2009) の研究では、不妊治療に失敗した者を対象として、治療の失敗によって得られたものについて検討している。得られたものとして、配偶者をはじめとする、周囲との関係がより深まっただけでなく、ものの価値観そのものが変容したことが報告された。ものの価値観とは、例えば、物事に対して諦めない姿勢が身についたこと、子どもがいない人生の受容などである。換言すれば、この研究は、失敗に終わった不妊治療の経験をネガティブなものとして捉えるだけでなく、成長・発達の観点からも考察しているともいえよう。さらに、ここでは、生涯発達という概念を援用することを試みたい。やまだ (2007) によると、友人の死などの喪失体験は人生に危機をもたらす出来事であるが、生涯発達の観点では、危機は人生を変容させ、成熟をもたらすという意味で、発達の契機にもなりうるという。このように考えると、子どもをもたないことを選択した後に、子どもがいない人生へと変容させ、移行するというその経験は、長い目で見れば、喪失を意味するだけにとどまらず、発達の機会ともとれるかもしれない。人は、数多くのライフイベントを経験する中で、その出来事をいかに乗り越えていくかによって、自己を成長させていく (小野寺, 2008)。この視点から、子どもを産めなかった経験によっても発達しうることが指摘され始め (竹家, 2008)、この点に着目した研究が日本でも少ないながら行われている。例えば、安田 (2012) は、不妊治療を経験しても子どもを授かることのできなかった女性が、子どもをもつことをめぐって、困難や葛藤を経験しつつも、発達していく様相をインタビュー調査によって示した。その様相とは、喪失を伴う治療経験になんらかの意味づけを行おうとする、前向きともいえる志向性であったという。竹家 (2008) は、生涯発達の観点から、不妊治療を経験した女性が、治療に折り合いをつけるという心理的なプロセスを質的に記述し、治療を契機に、視野の拡がりや価値観の変容だけでなく、“生成継承性の芽生え”がみられたと考察している。これらの研究はいずれも、子どもがいないことや不妊治療による喪

失に注目しただけではなく、喪失と獲得が表裏一体であるという生涯発達の観点 (e.g., Baltes, 1987) から検討を行い、不妊を経験することによる発達の様相を描き出したものであると言える。

さらに、生涯発達の観点では、個人のあり方を考える際に、他者との関係性が重要視されていることにも着目すべきである (荘島・竹家・鮫島・西山, 2009)。従来の研究でも、子どもがいない女性の精神的健康において、配偶者をはじめとする、身近な他者の“存在”が重要であることは示されてきた。例えば、Bures, Koropeckyj-Cox & Loree (2009) のレビューによっても、子どもの有無と婚姻状況 (例えば、既婚、離婚、死別、独身) を考慮して、中年期以降の女性たちの精神的健康を検討することの必要性が示されている。それでは、身近な他者との“関係性”が、子どものいない女性に及ぼす影響についてはどうだろう。Lund et al. (2009) は、不妊治療に失敗した女性にとって、家族や友人からの共感的理解が得られないことが、精神的健康の低減につながることを示した。このことから、身近な他者との関係性が、子どもをもてなかった女性の精神的健康に影響を及ぼすことが示唆された。しかしながら、周囲との“関係性”が、子どもがいない女性にどのような長期的な影響を及ぼすのかは、ほとんど検討されていないのが現状である。結婚している女性が子どものいない人生を送る上では、配偶者もまた、その人生を送る当事者であり、最も身近な他者とも言えるだろう。そのように考えると、身近な他者の中でも、特に、配偶者との関係性という観点に注目することもまた、必要不可欠ではないだろうか。そして、“個”としての発達を詳らかにするだけでなく、他者との関係性という文脈に着目する重要性が指摘されているが (やまだ, 2011)、このことは、子どもがいない女性にも当てはまると言えるだろう。

子どもを育てることによって、成人が発達する様相は、これまで海外だけでなく、日本においても研究が蓄積されてきている。従来の発達研究を振り返ると、子育ての経験による女性の発達を問うてきた意義は確かに大きいと言える。しかし、女性の発達が子どもを育てることのみに収斂されるわけでは決していない。この点は、女性の生涯発達に関して、今後考えていかなければならないひとつの重要な課題であるだろう。

2) 意味づけの多様性に着目する必要性

心理的喪失を経験するなどの危機にさらされたとき、人は、その出来事に何らかの意味を付与すること

によって、ネガティブな心理的な作用を“中和”させることができる（いわば、解毒剤のような働きをする）と考えられている（Harvey, 2000）。Koropeckyj-Cox（2002）では、中高年期以降における子どもがいないことの意味が、肯定的か否定的かを問うているが、実のところ、その意味づけは多様であることが、近年、他の研究によって示されている（e.g., Allen & Wiles, 2013）。例えば、子どものいない人生を受容できている人、できていない人だけでなく、そのはざままで揺れ動いてきた人、諦念を感じつつも受容し始めている人、周囲の孫の誕生がきっかけで、受容できていたはずだったが再び気持ちが揺れる経験をした人（Wirtberg et al., 2007）など、様々なタイプが存在するということが報告されている。この結果が示すことは、そのような意味づけを、単純に肯定的あるいは否定的なものとは区別することはできないというものである。さらに言えば、何をもって肯定的・否定的とするか、その基準自体も明確ではない。彼女らが何を、いかに感じているかという、その多様性に目を向けることこそが必要なのではないだろうか。この点に関して、遠藤（2002）は、これまでは日を当てられてこなかった“影”ともいえる存在が、背負わざるを得なかった状況をどのように受容し、どのように感じているかを明らかにしていくことが、今後の心理学全般における課題であると主張している。このように考えると、これまで“影”に潜んでいた、子どもがいない女性たちの視点から、それぞれが子どものいない人生をどのように選択し（あるいは選択せざるをえなかったのか）、現在はどのように意味づけているのか、当事者ひとりひとりの多様性を掘り取ることこそが、今後強く求められるのではないだろうか。

4. 日本における研究の今後の方向性

日本において、子どもがいない女性を対象にした心理学的研究は、端緒についたばかりである。国や文化によって、子どもをもつことの社会的意味や、生殖医療の進歩の度合い、生殖に関する倫理的規範は異なるだろう。実のところ、日本や欧米諸国を含めた18か国対象の国際調査“Starting Families”によって、日本は、人生の充実のためには、子どもの存在が重要視されていないことや、不妊を他者にオープンにできない傾向が最も高いことなどが報告されている（Boivin, 2010）。そして、子どもがいないことによる心理的影響に関しても、その傾向が国ごとに異なることが報告

されている（Huijts et al., 2013）。今後は、社会文化的文脈まで考慮した上で、日本独自の“子どもがいない”ことの意味や影響を、心理学的に深く考究していく必要がある。最後に、ここまでの議論をまとめ、子どもがいないことに関して、日本において今後行うべき研究の方向性を論じていきたい。

日本で行われてきた研究のほとんどは、不妊治療を経験した女性の治療の経験に着目しており、主に臨床心理学的な立場において、彼女らの心理的支援につなげることを目的としている。それらは、成人期後期から中年期を対象にした研究がほとんどである。治療を断念して約1年が経過した後、不妊治療を断念したことは肯定的に捉えている一方で、子どもを授からなかったことに関しては、否定的にしか捉えることのできない女性が存在する（竹家, 2009）。このことから、子どもがいないままになってしまった女性にとって、治療の経験だけでなく、子どもがいないことによる心理的な問題もまた、大きいのではないだろうか。

そして、実のところ、これまでの日本における研究では、不妊以外の理由で子どもがいない女性は、歯牙にもかけられてこなかったのが現状である。子どもがいないことによって、ネガティブな心理的影響が招来されるのは、不妊を経験した女性に限らないだろう。例えば、海外の知見ではあるが、子どもがいないことを自ら選択した人の中には、周囲からネガティブなステレオタイプ（“selfish” “cold” など）を向けられる経験をした人がいたと報告されている（Park, 2002）。このような経験によって、ネガティブな心理的作用が招来されることは予想される。海外では既に行われているように、不妊以外の理由で、子どもがいない女性に及ぼされる心理的な影響にも目を向ける必要がある。

さらに、今後は、他者との関係性の文脈からアプローチすることも重要である。特に、配偶者がどのように子どもがいないことを意味づけるのか、また、それによって、女性自身の精神的健康や意味づけにどのような影響が及ぼされるのか、検討する必要があるだろう。したがって、子どもの不在の心理的経験を詳らかにしていくのであれば、日本でこれまで対象とされてきた、いわゆる“子育て期”の不妊を経験した女性のための検討では不十分であるだろう。様々な理由で子どもがいない女性、さらに中年期及び老年期までを視野に入れ、他者との関係性をも探ることによって、初めて、生涯にわたって子どもがいないことや、その意味に関する本質的な理解につながるのかもしれない。

結語

本稿では、子どもをもたない選択をするまで、そして中年期以降を含むその後において、子どもがいないことの心理的影響について概説した上で、今後どのような研究が必要となるのかという点について論じてきた。ただし、この点に関しては、必ずしも本稿の議論だけにとどまるわけではなく、異なる視点からの議論もまた、必要であるだろう。さらに、子どもがいないことに関して、男性側の視点を取り上げることができなかったことは、本稿の限界のひとつである。今後は、子どもがいない人生に関する研究知見がより一層増えることに期待し、ここで結びとする。

注

- 1) 本稿では触れなかったが、ほかの理由で子どもがいないことも考えられる。難病を患っている人の存在がひとつである。また、事故や病気で子どもを亡くした人の存在もあげられ、子どもの死による、悲しみやその意味づけも報告されている (e.g., Keesee, Currier & Neimeyer, 2008)。

引用文献

- Albayrak, E., & Günay, O. (2007). State and trait anxiety levels of childless women in Kayseri, Turkey. *European Journal of Contraception and Reproductive Health Care*, **12**, 385-390.
- Allen, R.E.S., & Wiles, J.L. (2013). How older people position their late-life childlessness: A qualitative study. *Journal of Marriage and Family*, **75**, 206-220.
- Baltes, P.B. (1987). Theoretical propositions of life-span development psychology: On the dynamics between growth and decline. *Developmental psychology*, **23**, 611-626.
- Beckman, L.J., & Houser, B.B. (1982). The consequences of childlessness on the social-psychological well-being of older women. *Journal of Gerontology*, **37**, 243-250.
- Blenner, J.L. (1990). Passage through infertility treatment: A stage theory. *Journal of Nursing Scholarship*, **22**, 153-158.
- Boivin, J. (2010). Fertility: Findings from the international Starting Families study. *fertility: the Real Story* (pp.4-12). Geneva: Merck Serono.
- Bures, R.M., Koropecjy-Cox, T., & Loree, M. (2009). Childlessness, parenthood, and depressive symptoms among middle-aged and older adults. *Journals of Family Issues*, **30**, 670-687.
- Connidis, I.A., & McMullin, J.A. (1999). Permanent childlessness: Perceived advantages and disadvantages among older persons. *Canadian Journal on Aging / La Revue canadienne du vieillissement*, **18**, 447-465.
- Daniluk, J.C. (2001a). Reconstructing their lives: A longitudinal, qualitative analysis of the transition to biological childlessness for infertile couples. *Journal of Counseling and Development*, **79**, 439-449.
- Daniluk, J.C. (2001b). *The infertility survival guide: How to cope with the challenges while maintaining your sanity, dignity, and relationships*. Oakland, CA: New Harbinger Publications.
- DeLyser, G. (2012). At Midlife, intentionally childfree women and their experiences of regret. *Clinical Social Work Journal*, **40**, 66-74.
- DeOllos, I.Y., & Kapinus, C.A. (2002). Aging childless individuals and couples: Suggestions for new directions in research. *Sociological Inquiry*, **72**, 72-80.
- 遠藤利彦 (2002). 問いを発することと確かめること：心理学の方法論をめぐる——試論・私論 下山晴彦・子安増生 (編) 心理学の新しいかたち——方法への意識—— 誠信書房 pp.38-72.
- Erikson, E.H., & Erikson, J.M. (1982). *The life cycle completed: A review*. New York: W.W. Norton and Company. (エリクソン, E.H. エリクソン, J.M. 村瀬孝雄・近藤邦夫 (訳) (2001). ライフサイクル, その完結 みすず書房)
- Eugster, A., & Virgerhoets, A.J.J.M. (1999). Psychological aspects of in vitro fertilization: A review. *Social Science and Medicine*, **48**, 575-589.
- Ferland, P., & Caron, S.L. (2013). Exploring the long-term impact of female infertility: A qualitative analysis of interviews with post-menopausal women who remained childless. *Family Journal: Counseling and Therapy for Couples and Families*, **21**, 180-188.
- Gameiro, S., van den Belt-Dusebout, A.W., Bleiker, E., Braat, D., van Leeuwen, F.E., & Verhaak, C.M. (2014). Do children make you happier? Sustained child-wish and mental health in women 11-17 years after fertility treatment. *Human Reproduction*, **29**, 2238-2246.
- Greil, A.L. (1991). *Not yet pregnant: Infertile couples in contemporary America*. Piscataway, NJ, US: Rutgers University Press.
- Hansen, T. (2012). Parenthood and happiness: A review of folk theories versus empirical evidence. *Social Indicators Research*, **108**, 29-64.
- Harvey, J. H. (2000). *Give sorrow words: Perspectives on loss and trauma (Series in death, dying, and bereavement)*. New York: Brunner Routledge.
- Huijts, T., Kraaykamp, G., & Subramanian, S.V. (2013). Childlessness and psychological well-being in context: A multilevel study on 24 European countries. *European Sociological Review*, **29**, 32-47.
- Jeffries, S., & Konnert, C. (2002). Regret and psychological well-being among voluntarily and involuntarily childless women and mothers. *The International Journal of Aging and Human Development*, **54**, 89-106.
- Johansson, M., & Berg, M. (2005). Women's experiences of childlessness 2 years after the end of in vitro fertilization treatment. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, **19**, 58-63.
- 柏木恵子・永久ひさ子 (1999). 女性における子どもの価値——今、なぜ子を産むか—— 教育心理学研究, **47**, 170-179.
- Keesee, N.J., Currier, J.M., & Neimeyer, R.A. (2008). Predictors of grief following the death of one's child: The contribution of finding meaning. *Journal of Clinical Psychology*, **64**, 1145-1163.
- Keizer, R., Dykstra, P.A., & Jansen, M.D. (2008). Pathways into childlessness: Evidence of gendered life course dynamics. *Journal of Biosocial Science*, **40**, 863-878.
- 国民生活白書 (2005). 第 1 章第 1 節 コラム 不妊治療の状況
- 国立社会保障・人口増加研究所 (2012). 第14回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 夫婦調査の結果概要
- Koropecjy-Cox, T. (1998). Loneliness and depression in middle and old

- age: Are the childless more vulnerable? *Journals of Gerontology: SOCIAL SCIENCES*, **53**, 303-312.
- Koropecykj-Cox, T. (2002). Beyond Parental Status: Psychological Well-Being in Middle and Old Age. *Journal of Marriage and Family*, **64**, 957-971.
- Koropecykj-Cox, T., Pienta, A.M., & Brown, T.H. (2007). Women of the 1950s and the "normative" life course: The implications of childlessness, fertility timing, and marital status for psychological well-being in late midlife. *International Journal of Aging and Human Development*, **64**, 299-330.
- Langdrige, D., Sheeran, P., & Connolly, K. (2005). Understanding the reasons for parenthood. *Journal of Reproductive and Infant Psychology*, **23**, 121-133.
- Lee, G.L., Choi, W.H.H., Chan, C.H.Y., Chan, C.L.W., & Ng, L.H.Y. (2009). Life after unsuccessful IVF treatment in an assisted reproduction unit: A qualitative analysis of gains through loss among Chinese persons in Hong Kong. *Human Reproduction*, **24**, 1920-1929.
- Lund, R., Sejbaek, C.S., Christensen, U., & Schmidt, L. (2009). The impact of social relations on the incidence of severe depressive symptoms among infertile women and men. *Human Reproduction*, **24**, 2810-2820.
- NHK取材班 (2013). 産みたいのに産めない 卵子老化の衝撃 文藝春秋
- 日本産科婦人科学会 (2014). 平成25年度倫理委員会 登録・調査小委員会報告 (2012年分の体外受精・胚移植等の臨床実施成績および 2014年 7 月における登録施設名) 日本産科婦人科学会雑誌, **66**, 2445-2481.
- 日本産科婦人科学会 (2015). 不妊の定義の変更について 日本産科婦人科学会 Retrieved from http://www.jsog.or.jp/news/html/announce_20150902.html (2015年 9 月23日)
- Mahajan, N.N., Turnbull, D.A., Davies, M.J., Jindal, U.N., Briggs, N.E., & Taplin, J.E. (2009). Adjustment to infertility: The role of intrapersonal and interpersonal resources/vulnerabilities. *Human Reproduction*, **24**, 906-912.
- Matsubayashi, H., Hosoda, T., Izumi, S., Suzuki, T., Kondo, A., & Makino, T. (2004). Increased depression and anxiety in infertile Japanese women resulting from lack of husband's support and feelings of stress. *General Hospital Psychiatry*, **26**, 398-404.
- Matthews, R., & Matthews, A.M. (1986). Infertility and involuntary childlessness: The transition to nonparents. *Journal of Marriage and the Family*, **48**, 641-649.
- McQuillan, J., Greil, A.L., Shreffler, K.M., Wonch-Hill, P.A., Gentzler, K.C., & Hathcoat, J.D. (2012). Does the reason matter? Variations in childlessness concerns among U.S. women. *Journal of Marriage and Family*, **74**, 1166-1181.
- Mitchell, V., & Helson, R. (1990). Women's prime of life: Is it the 50s? *Psychology of Women Quarterly*, **14**, 451-470.
- 小野寺敦子 (2008). 成人期における自己の発達 榎本博明 (編) 自己心理学 2 : 生涯発達心理学へのアプローチ 金子書房 pp.208-225.
- Park, K. (2002). Stigma management among the voluntarily childless. *Sociological Perspectives*, **45**, 21-45.
- Paul, M.S., Berger, R., Berlow, N., Rovner-Ferguson, H., Figlerski, L., Gardner, S., & Malave, A.F. (2010). Posttraumatic growth and social support in individuals with infertility. *Human Reproduction*, **25**, 133-141.
- Peddie, L., van Teijlingen, E., & Bhattacharya, S. (2005). A qualitative study of women's decision-making at the end of IVF treatment. *Human Reproduction*, **20**, 1944-1951.
- Rosner, M. (2012). *Recovery from traumatic loss: A study of women living without children after infertility* (Unpublished doctoral dissertation). University of Pennsylvania, Pennsylvania.
- Rothrauff, T., & Cooney, T.M. (2008). The role of generativity in psychological well-being: Does it differ for childless adults and parents? *Journal of Adult Development*, **15**, 148-159.
- 荘島幸子・竹家一美・鮫島輝美・西山直子 (2009). 関係性 (家族間・世代間) としての生涯発達——ナラティブ・アプローチからその変化プロセスを捉える—— 研究開発コロキウム: 平成20年度成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development)
- 竹家一美 (2008). 不妊治療を経験した女性たちの語り——「子どもを持たない人生」という選択 質的心理学研究, **7**, 118-137.
- 竹家一美 (2009). ある不妊女性の選択と喪失: 対話的省察実践によるナラティブ・テキストの再検討 京都大学大学院教育学研究科紀要, **55**, 351-363.
- Verhaak, C.M., Smeenk, J.M.J., Evers, A.W.M., Kremer, J.A.M., Kraaijmaat, F.W., & Braat, D.D.M. (2007). Women's emotional adjustment to IVF: A systematic review of 25 years of research. *Human Reproduction Update*, **13**, 27-36.
- Volgsten, H., Svanberg, A.S., & Olsson, P. (2010). Unresolved grief in women and men in Sweden three years after undergoing unsuccessful in vitro fertilization treatment. *Acta Obstetrica et Gynecologica Scandinavica*, **89**, 1290-1297.
- Wirtberg, I., Möller, A., Hogström, L., Tronstad, S-E., & Losos, A. (2007). Life 20 years after unsuccessful infertility treatment. *Human Reproduction*, **22**, 598-604.
- やまだようこ (2007). 喪失の語り——生成のライフストーリー—— 新曜社
- やまだようこ (2011). 「発達」と「発達段階」を問う: 生涯発達とナラティブ論の視点から 発達心理学研究, **22**, 418-427.
- 安田裕子 (2005). 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程——治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から—— 質的心理学研究, **4**, 201-226.
- 安田裕子 (2012). 不妊治療者の人生選択——ライフストーリーを捉えるナラティブ・アプローチ—— 新曜社
- 安田裕子・やまだようこ (2008). 不妊治療をやめる選択プロセスの語り——女性の生涯発達の観点から パーソナリティ研究, **16**, 279-294.

謝辞

本稿の執筆にあたり、ご指導及び貴重なご助言をくださった東京大学大学院の遠藤利彦教授に心より感謝申し上げます。また、文章に関しては、東京大学大学院の榊原良太さん、英文作成においては、東京大学大学院の羽倉英美さんに、ご助言をいただきました。記して、御礼申し上げます。

(指導教員 遠藤利彦教授)